

ミクロな視点から見る在日華僑のアイデンティティの形成過程：二世，三世および「リターン者」のライフ・ヒストリーを通して

著者	張 玉玲
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	30
号	1
ページ	57-91
発行年	2005-09-30
URL	http://doi.org/10.15021/00003989

ミクロな視点から見る在日華僑のアイデンティティ の形成過程

—二世、三世および「リターン者」のライフ・ヒストリーを通して—

張 玉 玲*

The Process of Identity Formation among the Chinese Overseas in Japan:
Analysis of Their Life Histories

Yuling Zhang

本稿では、華僑二世、三世および華僑社会へのリターン者（「復帰」者）のライフ・ヒストリーを通して、ミクロな視点から在日華僑が如何にエスニック境界を規定しアイデンティティを獲得していくのかを考察してみる。具体的には、世代交替に伴い、華僑の日本社会への同化が進み、華僑社会の後継者が不足している中、異なる民族・文化観を持つ二世と三世はそれぞれどのように「日本人」、「中国人」そして「華僑」を定義し、そして自らを同定しているのか、特に二世と比べ、三世がアイデンティティを確立しようとする際、エスニック境界の規定に用いられる基準とは何か、また日本人として日本社会へ溶け込もうとしたが、様々な理由で華僑社会に戻った「リターン者」は、如何に両者の間に境界線を引き、いずれかの構成員となろうとしたのか、などの問いを彼らの「語り」を通して分析し、議論していく。そしてこれらの議論を踏まえた上で、エスニック・アイデンティティ形成の条件と華僑における「中国人」の意味合いを改めて検討し、華僑社会の今後を展望してみたい。

This paper examines the formation of ethnic boundaries and identities among the Chinese Overseas in Japan through the analysis of their life histories. Nisei (the second generation) and Sansei (the third generation) were born in different periods and vary in their philosophies. What are their changing views and definitions of Japanese, Chinese and Chinese Overseas, as the

*愛知淑徳大学コミュニケーション学部

Key Words : identity formation, Chinese, the second and third generation Chinese Overseas, ethnic boundaries, life history

キーワード : アイデンティティの形成, 中国人, 華僑二世, 華僑三世, エスニック境界, ライフ・ヒストリー

Chinese community has been assimilated into Japan? How do they identify themselves? Especially compared to Nisei, what ethnic boundaries have Sansei set in order to establish their identities? This paper will also discuss those who have returned to the Chinese community for various reasons after trying to live as Japanese. How did they recognize the division between Japanese and Chinese Overseas and try to be a member of either community? Lastly, based on the analysis, I will consider the formation of ethnic identities and the meanings of Chinese-ness for Chinese Overseas, as well as the prospects for the Chinese community in Japan.

1 はじめに	3.2 「中国人」と「日本人」, そして「在日韓国・朝鮮人」
2 華僑二世における中国人意識の確立	3.3 華僑青年の中国人意識の萌芽
2.1 「私は中国人だから」	4 華僑社会への「リターン者」とエスニック・アイデンティティの操作
2.2 日本に根ざした中国人情緒	4.1 「日本人になりたかった」
2.3 「中国人だ, いや, 日本華僑かな」	4.2 「『華僑』から逃げたくて」
2.4 「僕は中国語ができない中国人」	4.3 「自ら飛び込むことが重要だ」
3 華僑三世の華僑意識の萌芽	5 おわりに
3.1 中国人らしき名前との葛藤	

1 はじめに

150年の歴史を持つ在日華僑社会は現在重要な転換期を迎えている。内部では世代交替が進み、戦前中国本土から渡ってきた華僑一世に代わり、終戦前後に日本で生まれた二世が華僑社会をリードするようになった。一方、華僑社会の発展とともに、華僑社会の大きな課題は、中国語や中国文化に興味を持たなくなった若い世代に如何に中国人意識を確立させるかというものになってきた。また、外部環境としては、日中国交回復およびそれ以降の中国经济発展に伴う日本人の中国文化への関心の高まりや日本国内の観光ブームが挙げられる。特に中華街のある長崎、神戸、横浜においては、これらの外的環境に触発されて華僑文化の復興・創造運動が盛んに行われている。これらの文化活動において次から次へと復興・創造された華やかな「中国文化」は、「中

国的なるもの」を求める観光化への対応である一方、華僑三世に中国文化に興味を持たせ、中国人意識を喚起させる意図も込められている（張 2004）。

日本において、華僑アイデンティティ研究の先駆けとなったのは、戴の日本華僑を含む第二次世界大戦後の華僑の変化についての議論である（戴 1980, 1991）。彼はその論の中で、華人が自己変革に努め、居住国社会で自立と共生を求めていくための精神的支柱こそ中華人性（Chinese-ness）であるとし、彼らにとって「華人としてのニューアイデンティティの確立は、緊急にして必要不可欠な課題」だと指摘した。これを受け、過は、婚姻観、配偶者の選択、婚姻儀礼の慣習および日本人との国際結婚という側面から歴史的視点に基づいて、アンケート調査の形で在日華僑の婚姻の変遷を考察し、さらに比較の方法によって世代交替による婚姻形態の変化を論じた。過は、「エスニック集団としての華僑は、戦後、日本定住という自らの選択に基づき、彼らの社会関係の重心を、明らかに華僑と母国（または故郷）や母国の家族・親族との関係から、華僑と居住国日本および日本人との関係に転換してきた」。彼らは「在日中国人としてのニューアイデンティティの確立を追求し続けてきている。彼らのアイデンティティは、時代、社会、集団、家族、自身の変化に伴い、世代交替とともにエスニック・アイデンティティからナショナル・アイデンティティに変容し、多様化している」（過 1999: 208-209）と指摘した。過の研究の意義は、婚姻という人生にとって節目となる通過儀礼に注目し、緻密な分析を行ったところにある他、世代と年齢区分によって、華僑を「年配の華僑」（戦前の世代）、「中高年華僑」（日中国交正常化以前の世代）と若い華僑（日中国交正常化以降の世代）の三つのモデルに分類し、華僑アイデンティティの代代的変化を究明しようとする分析の枠組みも重要な示唆を与えてくれたところにある。上記の研究以外にも、杜（1991）と朱（1993）などが挙げられる。両者は、それぞれ華僑学校の生徒と華僑総会の会員を対象に、アンケート調査の形で華僑社会に対して全体的な考察を行ったものである。前者は、華僑子弟は文化的に日本化した部分がある一方、「内なる精神形態は同化が極めて少なく、非常に中国人意識濃厚な帰属意識を保有している」（杜 1991: 126）と結論付けたが、後者は「日本の華僑社会は華人化しなかった」が、「長期的に見れば、華僑社会は日本社会に『自然同化』される可能性がかなりある」（朱 1993）と主張した¹⁾。

これらの研究は、中国政府による華僑、華人への定義²⁾に基づいて分析を行っていったもので、華僑の政治的アイデンティティへの考察に重点が置かれていたと考えられる。これらの研究を踏まえた上で、張（2003）は、横浜華僑による獅子舞の伝承形態の歴史的変遷を分析し、彼らの「中国文化」に対する認識と華僑アイデンティ

ティの段階的变化を考察した上で、華僑は中国大陸や台湾と区別される独自の「華僑文化」を創出することによって、日本の地域社会に根ざしたローカルなアイデンティティを獲得したと論じた。さらに、張（2004）では、1980年代後半より始まった横浜関帝廟の再建およびその後の一連の「復興」運動に着目し、華僑が、観光化という外部条件を利用し、「華僑」を「日本社会」から区別するためのシンボルとして伝統文化とともに新たな文化要素を次から次へと中華街に取り入れ、自らエスニック境界を定めた過程を明らかにした。

以上の研究で、それぞれの問題意識に基づき、様々な方法を用いて華僑社会について総合的に考察したことによって、華僑社会の全体像を見ることができよう。それによって、日本の華僑社会のエスニック集団としての性質を強調し、中国本土や台湾、世界各国の中国系の人々および彼らの文化と同様、日本華僑や華僑文化がより広義的な「中国人」、「中国文化」を構成する一部として位置付けることが可能となるだろう。これは華僑関連の諸研究に示唆を与えるものと思われる。

しかしエスニック集団としての華僑社会が注目される一方、個人の華僑アイデンティティの形成過程については未だに考察されていないのが現状である。アイデンティティは内面的世界の現れであるがゆえに、可変的でかつ曖昧なものである。異なる世代のアイデンティティの形成が違うのはもちろんのことで、同世代の者、あるいは同じ人物であっても、置かれた環境の変化に応じてアイデンティティの様相が異なることがありうる。筆者は、「集団」としての華僑による文化活動を通して華僑エスニシティを考察してきたが、その過程で、文化活動の主催者および参加者とそうでない者の意識は必ずしも同じではなく、むしろ大きく異なることや、同じ世代の華僑でも、各自の家庭環境、教育そして仕事などの経歴によって、アイデンティティを形成する時期とその様相が異なることを、多くの華僑に面接調査している中、幾度も確認できた。

そこで、上記の先行研究を踏まえて、本稿では、個々人の華僑のライフ・ヒストリーを分析することによって、華僑アイデンティティの形成過程をミクロな視点から考察し、その上で、華僑社会全体の行方を展望してみる。具体的には、個人としての華僑はどのような環境の中で、どのようにアイデンティティを形成していったのか、そして何より「境界人」である彼らは異なる状況の中で如何にして自己を定義し、境界線を調整し定めようとするのか、などの問題について、華僑二世（第2章、4名）、三世（第3章、6名）と華僑社会のリターン者（第4章、3名）の3つのカテゴリーを設けて、逐次に検討していく。

本文で用いる「華僑」という言葉について断っておきたい。中国政府は、中国国籍を保持するか居住国の国籍を取得したかを基準に海外に定住する中国系の人々をそれぞれ「華僑」と「華人」に定義している²⁾。日本では、華人という呼称自体が普及しておらず、日本国籍を保持していても自ら「華僑」と称する者が少なくない。従って、本稿では、特別な場合を除き「華僑」という一語をもって華僑、華人をあらわすこととする。また、1979年以降、中国大陸から来日した中国人をそれまでの中国人と比較し、「新華僑」と呼ぶが、本稿は1972年以前来日し、後に定住するようになった中国人および彼らの子孫である「老華僑」を対象とするため、説明がない限り、「華僑」は「老華僑」を指す。なお、本文で扱われる「華僑二世」とは、中国生まれの親を持ち、本人が日本生まれまたは日本育ちの者であり、「華僑三世」とは、日本育ちの親を持ち、本人が日本生まれ、日本育ちの者であると定めておく。また、「リターン者」とは、一旦日本社会に飛び込み、のちに再び華僑社会と関わるようになった者をさすこととする。

本稿で取り上げられた計13名の華僑の事例は、筆者が2000年～2004年の四年間にわたって、東京、横浜、大阪、京都、神戸などを訪れた際に行った30数名のインタビューから選りだしたものである。インタビューは数回にわたって面接、電話、電子メールなどの形で行われたもので、言語は、中国語と日本語を用いた。

中国出身の筆者は本稿の対象である「華僑」と文化的出自が同様であり、インタビューに応じてくれた華僑の方々の中には、異なる文化集団に対するような「警戒心」がなく、特に華僑二世は、むしろある種の「郷愁」を込めて話してくれた人が多くいたと思われる。しかし、データの整理にあたっては、あくまでも華僑を「客体」として見なし、彼らをめぐる国際関係や日本の社会事情などの外部環境を考慮しながら、彼らの語った自分の一生、あるいは特定の時期のストーリーを客観的に分析しようと心がけた。

2 華僑二世における中国人意識の確立

1940～50年代に生まれ育った華僑二世は、現在50～60代の人が多く、華僑社会をリードしてきた中堅的存在である。彼らの多くは、第二次世界大戦およびその後の混乱期を直接経験し、その後も、日本各地で盛んに行われた同学会、青年会、華僑青年ねんかんせつ聯歓節、関西華僑青年聯歓節などに参加し、新しく成立した中国や毛沢東、レーニン思想についての学習会を行ってきた。従って、華僑二世は日本を生まれ育った故郷と

し、日本社会に定住する意思が固い一方、祖国への執着が根強く残っており、濃厚な中国人意識を保っている。また、華僑三世を後継者として育成するという意図が、彼らの他の活動に反映されている。現在年に一回行われている全国の華僑青年の交流会はその一例である。以下、華僑二世のアイデンティティの形成過程を四人の事例を通して見てみよう。

2.1 「私は中国人だから」

福建省福清出身の華僑二世 IIa（二世の a さん、以下同）は、愛媛県に生まれ育ち、現在神戸に在住している。

〈父の来日と行商人の仕事〉

IIa 家が日本と縁を持つようになったのは、IIa の祖父の時代に遡る。祖父は長崎、神戸と函館などを行商して、四～五年経過した後、中国へ帰国した。次に IIa の祖父は自分の代わりに IIa の父を日本に行かせた。父が 11 か 12 歳の時だった。父は同郷人のグループと一緒にまず小船で数日かけて上海まで行き、そこからさらに時間をかけて長崎へたどり着いた。祖父は、父に日本で商売を学び、お金を稼いでもらうために日本に行かせたのだった。父はまず大阪などで数年間行商をし、和歌山で日本人である母に出会った。二人は中国に帰って、両親の承諾を得て結婚した。後に故郷で長女が生まれ、3歳の時長女を国に残し、二人は再び来日した。1922年頃のことである。それ以来、1972年にIIaと帰省するまでの50年間、父が中国へ帰ることはなかった。長女を除いた7人の子どもはみんな日本で生まれた。父は他の福清人とグループを作って長年愛媛の田舎で行商しているうちに、定着していった。当時、彼らは日本の言葉も良くわからなかったが、競合相手が少ない愛媛で事業を展開することで、市場を独占し、販売ルートを確保することができた。

〈教育、就職、家庭〉

IIa は 1936 年に次男として愛媛に生まれた。小学校から高校までずっと日本人の学校に通っていた。戦時中、家族は日本人に、ちゃんころ³⁾とか支那人とか呼ばれ、軽蔑されたことがあるという。

高校卒業後、22、23歳の時、兄の勧めで、愛媛から尾道を経て神戸に出てきた。父の呉服商のつながりから洋服の販売を手がけた。現在中国との貿易を営みながら、日本語学校を経営している。故郷の福清にも日本語学校を開設し、成績優秀者だけ、

教師の推薦を得て（ただし、半年以上の日本語学習歴が必要）日本の日本語学校に入学させている。IIa が経営する日本語学校は、故郷である福清からの就学生が多い。

親の意思によって IIa は、同じ福清出身の女性と見合いし、結婚した。IIa は自分の結婚観念について、以下のように筆者に語った。「中国人同士の結婚が一番いいと思う。中国人男性はやさしいし、何より最も重要なのは中国では男女平等だということ。日本人男性は『お茶』、『風呂』、『飯』とか一言で偉そうに嫁に命令するけど、うちでは『自分でやりなさい』と言われている。子どもたちに日本人と結婚させたくはないが、今の若者はみんな自由恋愛だし、結婚を反対しても聞いてくれない⁴⁾。

IIa には、二人の息子がいる。二人とも神戸中華同文学校を出て、日本の高校・大学に進学した。長男は自動車関係の会社を経営しているが、次男は東京のある会社に勤めている。息子を甘やかしたくはないから、あえて一緒に会社を運営させようとしなかったという。

〈国籍、華僑社会〉

IIa は華僑学校に通ったことがなく、中国語も話せないが、中国国籍に強いこだわりを持っている。「自分が中国人であることが嫌になって、なぜ父親は日本人にしてくれなかったかと思うこともあった。しかし、今は中国人でいてよかったと思う。中国のパスポートを持っていると、中国にいる中国人は、みんなびっくりする。逆に、私のように日本に生まれ育った華僑は中国ののではなく日本のパスポートを持っていると思われ、ややこしいこともある。うちの家族はみんな中国国籍で、中国に行く時、税関でなかなか中国人と信じてもらえない。数年前に香港経由で中国に入国する時私と息子はハプニングに遭った。税関で中国のパスポートを何回もチェックされ、『この中国のパスポートは偽物だから、あなたの日本のパスポートも見せてくれ』と何回も要求された。その時、大学生である息子は中国語で『私は中国人だ』と怒り、大きな声で叫んだ。後ろにいた私はその大声にびっくりしたが、内心で喜んだ。すごくうれしかった。」と IIa は語ってくれた。

税関では、中国語ができない、外見も日本人らしき彼らが中国人パスポートを持っていることを不審に思われたのだと、IIa 父子はわかっていた。また、この経験によって、IIa は二度と中国の税関を通りたくないほど不愉快な思いもした。しかし、「私はそれでも中国国籍を維持し続けていく。改めていうまでもなく、自分は中国人だから。」と IIa は言う。息子は、日本人女性と結婚し、今年（2003 年）生まれた孫は日本国籍となっていたが、「中国人は中国国籍でなければならない」と思い、IIa は領事

館に行って、日本国籍離脱手続きをし、中国国籍を取得させた。IIaは「今、まだ赤ちゃんだけど、もう永住ビザを持っている中国人だ」と満足そうに言った。

IIaが愛媛の田舎にいた時、たまたま自分の苗字が日本人の中にもよくあるもので、みんなから日本人だと思われたし、自分も中国人だと意識したことがなかったという。「周りは日本人ばかりで、中国人であることを強く主張できないし。だから、自分が中国人、華僑であることを隠している人の気持ちが、私にはよくわかる。23歳で神戸に出てきて、周りに中国人、福清人がいっぱいいて、困ったことがあればみんなまで助け合った。自然に自分の中に中国人意識が芽生えてきて、そして強くなった。みんなと付き合っているうちに、福建同郷会の仕事をやってくれないかとの誘いも出てきた。こういった奉仕精神も、中国人や同郷人と付き合っているうちに身につくものではないかと思う。」とIIaは言う。

IIaは仕事上の関係もあり、中国や故郷福清とのつながりを強く保っている。「中国の経済的発展は早くて、変化も大きい。1972年に初めて故郷に帰った時、みんな物珍しそうに集まり、子ども達はお金をくれと要求してきた。みんなに少しだが、お金や物を配った。私だけでなく、先輩たちみんながそうしていた。今帰って、相変わらずみんなは集まり、お金を要求しなくなった。逆にこちらに何かプレゼントしてくれる。私たちよりも裕福かも。」とIIaは笑った。

以上からわかるように、日本生まれ、日本育ちのIIaはしばらく中国人が少ない田舎で「日本人」として暮らしていたが、神戸で多くの同郷人との緊密なつながりの中で、強い中国人意識を徐々に獲得していった。様々な原因で華僑学校に通えず、そのため中国語も話せないが、神戸で結婚し定住してから、子どもを同文学校に入学させたことや、積極的に同郷会の仕事に携わり、中国（故郷）での事業を展開したことや、中国国籍にこだわることなどから、IIaは積極的に「中国人」であるシンボルを保とうとしていることが伺われる。

2.2 日本に根ざした中国人情緒

IIbは神戸に生まれ育った華僑二世である。彼は小、中学教育を華僑学校で受け、家庭でも親と故郷の方言で話しているため、インタビューは中国語（普通話）と方言を混ぜて行った。IIbは兵庫県内で数店舗の中華料理店を経営している以外、同郷団体のメンバーなどとしても活躍している。以下のインタビューは2003年10月に行われたものである。

〈父の来日と仕事〉

IIbの父は1907年に中国山東省のある村に生まれた。15歳ぐらいから大連の親戚を頼って、中華料理店で手伝いをはじめ、21、22歳の時に知り合いを頼って来日した。まず東京に行ったが、後に京都、神戸へ移った。当時同郷人が神戸で中華料理店を経営しており、そこで働かせてもらった。しばらくの間店で休みなしに働いた後、中国の田舎に帰って結婚した。後にIIbの兄と姉が生まれた。母と兄、姉を故郷に残し、再び父は一人で日本に戻った。その後、年に一回故郷に帰っていたが、兄と姉が病気になりなかなか治らなかったため、1941年4月、母は二人を連れて来日した。病気が治ったら帰国するつもりだったが、戦争が続き、そのまま日本に留まった。IIbはその年の12月、神戸に生まれた。その後、IIbの弟も神戸で生まれた。昭和18年(1943年)、父は念願の中華料理店を開店した。1945年の空襲で店は焼け落ちたが、その後、再建された。

〈教育と初めての帰国〉

IIbは華僑学校で小、中学教育を受けた後、日本の高校、大学に進学し、商業を勉強した。卒業後、二年間会社に勤め、その後父親の事業を引き継いだ。

1975年、IIbは初めて父母と一緒に帰国した。中国の税関で書類審査などを受けた時、税関の服務員の傲慢で人を疑う態度に苛立ちを感じ、まだ若かったIIbは税関の人を怒り、喧嘩した。またデパートで買い物をする時も、店員の無愛想な態度に腹が立ったという。

この帰郷体験は、IIbに自分と本土の中国人との違いを認識させ、彼の中国、故郷に対する思いを一変させた。IIbは小さいころから家庭で故郷の方言を使って育ったから、故郷に帰って同じ言葉を聴くことができ、安心感があつた反面、まったく違う中国の習慣や価値観に戸惑いを感じ、カルチャーショックを受けたことが窺われる。

〈婚姻と子どもの教育〉

婚姻について、IIbは以下のように語った。「父はかつて、結婚相手は同郷人でなければいけないと私たち兄弟に言った。兄は同郷の華僑と結婚できたが、私が結婚する年齢になると、結局同郷人の女性とは縁がなく、他の出身地の中国人女性と結婚した。今、子どもたちの交際を見ていると国籍なんか気にしていないようだ。若者たちはみんな日本人と結婚し、生まれてくる子どもも日本人になる」。

IIbには四人の子ども、三女一男がいて、みんな華僑学校で十分な民族教育を受け

させた。「華僑学校で中国語を学ばせるべきだ」と IIb は言う。一方、友人がほとんど日本人である子どもたちは友人と海外旅行や留学に行く時、外国人であるため様々な不便さを経験している。IIb は「もうこんな年で、中国に帰ること（定住）はないだろう」と思い、子どもたちと相談した結果、1996年に日本国籍を取得した。

両親とも華僑一世である中国人の家庭に生まれ育ち、華僑学校でもたっぷり民族教育を受けた IIb は当然のように中国人アイデンティティを獲得した。IIa とほぼ同じところで、同じくはじめての帰郷であるにもかかわらず、IIb の中国に対する苛立ちが IIa より強く感じられる。そこには、様々な要因が考えられるが、IIb は華僑学校で中国語を学び、ある程度の中国文化を身につけていたからこそ、自分が中国人であるとより強く信じていた。だからこそ、本国にいる中国人との違いを感じ、あるいは同じ中国人として扱われない時に受けたショックはより大きかったのだと思われる。

また、IIa と同様、子どもに中国語を勉強させ、中国文化を保持させる一方、結婚相手の選択や中国国籍の保持を強要しない IIb の考えは、まさに日本の地域社会に根ざした「老華僑」の特徴であると思われる。

2.3 「中国人だ、いや、日本華僑かな」

IIc は、広東出身の華僑二世である。現在 X 華僑総会に勤めている。

〈教育と華僑総会の仕事〉

父は戦前コックとして来日したらしい。1948年に IIc は横浜に生まれた。1956年横浜山手中華学校幼稚園に入り(新校舎)、その後、横浜山手中華学校で小、中、高校の教育を受けた。後に大学受験の資格を取るために一年間日本の専門学校に通学⁵⁾。20歳で華僑総会に入り、貿易部門を担当した。その後も華僑総会での仕事を続け様々な経験を積み重ねてきた。当時は、東西冷戦の時期に当たり、華僑総会は様々な闘争に対応しなければならなかった。「反共する日本政府と台湾当局の他に、華青闘⁶⁾もあった。『闘争』する青年の中に横浜山手中華学校にいた時の同級生もいた」が、IIc は華僑総会の立場に立って、同級生だった人にも異議をとらなえた。

また、IIc は以下のようなことも語ってくれた。1972年に、中日国交が回復し、中日友好が叫ばれたが、日本当局の中国人、華僑に対する警戒心は一日も緩まっていた。華僑は経済的制限を受け、社会的地位が抑えられており、実際は10年ぐらい前までは、華僑をめぐる環境は基本的に何も変わらなかった。福祉面だけは、1972

年以降国民健康保険に加入することができるようになるなど、改善され、今は日本人と変わらない。

〈国籍と子どもの教育〉

IIcの妻は中国で生まれ育った日本人「残留孤児」の娘であり、日本国籍を持っている。明るい性格で、中、日二ヶ国語を使いこなしている。二人は親の紹介で知り合い、結婚した。現在二人の息子がいる。

IIcの次男は1986年4月生まれで、日本の国籍法が改正された後であることから、日本国籍になっている⁷⁾。長男は中国国籍だったが、兄弟が一致するよう、長男の国籍も日本に変えた。一家四人でIIc本人だけが中国国籍なのだが、「私は中国国籍のままでもいい。貿易上の便宜で帰化した人もいるが、私は華僑総会にいるし、帰化しなくても大した支障がない。」とIIcは言う。一方、帰化した人は必ずしも考え方や価値観などが変わるとは限らないとIIcは考えており、「それは人それぞれの経歴と考え方によると思う。帰化した人の中に、華僑総会のメンバーと友情を保っている人も少なくはない。」と彼は言う。

IIc夫婦は二人の子どもを横浜山手中華学校に入学させ、民族教育を受けさせた。IIcにとって、子どもを華僑学校に送ることは自然なことだったという。「私自身が山手中華学校の卒業生であるし、中国人は中国人の学校で学び、中国語を話すべきだと思うから。また、個人的には、中国語を勉強することはメリットがあると思う。中国経済は徐々に発展してきているから、将来的には中国語を仕事の道具として使えるだろう。」とIIcは語った。二人の子どもが山手中華学校を卒業し、現在長男は日本の大学、次男は日本の高校に通っている。

若い時、IIcは様々な差別を受けた経験がある。専門学校にいた時、アルバイトは断られ続けた。そのため、「日本には良い感情を持っていない。その代わりにますます祖国中国への感情を深めた。」とIIcは言う。こうしたIIcは、自分は何人だと思いかと聞かれる時、「私は中国人だ」と迷わず答える。「だけど、最近中国からきた中国人とは違う。日本人でもないから、私は何人だろうね。やはり、日本華僑の一員かな。でも、中国が強く、豊かな国になることを祈っている。」と、新華僑との違いも意識しての華僑アイデンティティを表明した。

長年「華僑総会」という日本と華僑、中国と日本をつなぐ特殊な職場で働いてきたが故に、IIcは中国人の立場に立ち、在日華僑の利益を考えながら仕事を続けてきた。

その中で、彼の日本に対する認識も深まっていった。従って、IICの中国人意識は国家としての日本との関わりの中で獲得したと考えられる。一方、IICは子どもに民族教育をしっかりと受けさせるが、長男の中国国籍への対応からわかるように、子どもたちが日本を拠点に活躍するのに必要と思われる条件を整えようとしており、彼の日本社会に根をおろしたアイデンティティを伺うことができる。

2.4 「僕は中国語ができない中国人」

IIdは、京都在住の福建福清出身の華僑二世である。現在京都の華僑コミュニティで活躍している。

IIdの父は10歳の時(1912年)来日、日中戦争勃発前の1930年には、妻を中国の故郷に帰した。終戦の翌年、1946年に父は日本で再婚した。1947年に姉が、1949年にIIdが生まれた。父は理髪業と飲食業に従事していたこともあり、IIdは25歳まで理髪の仕事をしていた。その後、華僑総会が人手不足であることから、職員として華僑総会に入ったが、1981年に辞めて、自ら起業した。しかし、1998年、再び華僑総会の面倒を見てくれと頼まれたため、IIdはまた華僑総会に入った。

IIdは日本の学校で高校まで教育を受けた。「中国語ができない中国人だ」と自らを揶揄した。学校でそれほど差別を受けたことはなかったが、コンプレックスがあった。それは、日本人が中国人に対して、外国人として差別しつつ、中国が日本文化の源流でもあるということで尊敬するというジレンマのある感情と同じレベルのものであると、IIdは言う。

中国の文化大革命前後、日本全国の華僑青年によって行われた「聯歡節」⁸⁾に高校生だったIIdも参加した。毛沢東、レーニン、共産党宣言などについて政治学習会が行われていて、これらの学習会や青年たちの交流会に参加するうち、同郷人意識、中国人意識ができて、中国人は連携を深めるべきだと思うようになった。IIdのコンプレックスが民族意識に変わった。

IIdは、1980年代から90年代にかけて中国で商売をした経験がある。しかし、信頼して中国での仕事を任せた知り合いに裏切られ、商売はうまくいかなかった。あれだけ学習会に参加し、中国や共産党について勉強したIIdも、中国は人と人との信頼関係より利益ばかり追求する国となったと、残念そうに呟いた。また、福建出身華僑の伝統行事である普度勝会には最近留学生も手伝いに来ているが、習慣や価値観の違いを彼らに対し、「『郷に入れば郷に従え』という諺があるように、日本に来た以上、協調性を持って仕事をしてほしい」とIIdは言い、日本に生まれ育った自分、老華僑と

中国で生まれ育った中国人との間に存在する違いをさりげなく強調した。

一方で、中国人の不法入国者は福建出身者が大多数を占めているという話題にふれた時、IId は、「不法入国者が最近増加していると報道されるが、現実には廉価な労働力は必要とされている。外国人労働力を積極的に受け入れるべきではないか」と意見を述べた。

以上、IId は華僑学校で教育を受けておらず、中国人としてのシンボルのひとつ「中国語」も話せないが、日本全国の華僑青年との交流を通して、彼は強い民族意識を獲得し、華僑コミュニティに帰属意識を持っていることが窺われた。また、様々な経験を積み重ねていくうちに、彼の中国や日本に対する感情は少しずつ変化していったが、故郷中国を思う複雑な気持ちが語りの中から読み取れる。

第2章では、華僑二世の事例を四つ紹介した(表1)。四人とも華僑社会でリーダーシップを発揮している人物であり、①同郷人とのつながり、中国国籍の保持や、結婚相手の出身地へのこだわりなど、強い中国人意識を保持しているように思われる。これは、これらの華僑二世がアイデンティティが形成される時期と思われる1950～60年代の歴史的背景によるものであり、戦争を経験した華僑一世の家庭での躰から来るものでもあった。同郷人との交流や助け合い、華僑組織・団体を通じた他の華僑との接触、そして親のつながりや仕事によって結び付けられた中国(故郷)との緊密なつながりなどが、彼らの中国人アイデンティティの形成・維持に作用したと考えられる。ただ、IIaとIIbの故郷への感情の違いからわかるように、華僑二世の中国に対する認識は、それぞれの育った環境や体験などによって多様な様相を呈している。②子女に中国語を習得させるが、中国国籍を保持したり中国人と結婚することなどを強要しない、などの考えから、華僑二世は、自分も子どもも日本社会で生活していくための便宜を図っているように思われ、中国文化を保持しながらも日本社会に根ざした華僑アイデンティティを何うことができる。

3 華僑三世の華僑意識の萌芽

現在主に20代から40代の華僑三世は、高齢に近づく華僑二世の後を継いで、華僑社会をリードしていく存在とされ、華僑二世から多大な期待を寄せられている。しかし、上記の二世の語りからもわかるように、彼らの子どもでもある華僑三世は必ずしも華僑社会の中で生活しあるいは華僑社会と緊密なつながりを保っているわけではな

表1 華僑二世の体験とアイデンティティの対照

世代	人物	性別	出身地(中国)	出身地(日本)	出生年	教育と言語	職業と社会活動	アイデンティティの特徴	世代の共通点
二世	Ila	男	福建福清	愛媛	1936	日本の学校に通い、日本語しか話せない	日中間貿易、日本語学校経営。同郷会や華僑団体による活動へ参加する	在日福清人ネットワークを頼ってきた。仕事もプライベートも中国籍とのつながりを持っている。中国籍にこだわっている。中国人意識が強い。子女に結婚相手を選択する自由を与える。	①中国国籍を保持したり、同郷人とのつながりを守ったり、結婚相手の出身地へこだわっているなど、中国人意識が強い。②子女に中国文化の保持を強要しない。子女の日本での生活の為に日本国籍の取得に賛同。③中国本土や新たに来日した中国人から自らを区別する。
	Ilb	男	山東蓬萊	神戸	1941	華僑学校(中学校まで)、日本の大学。日本語、中国語(標準語+山東方言)	中華料理店経営。同郷会や華僑団体による活動へ参加する以外、地域社会の団体の活動にも参加。	中国人意識の形成と維持の動力は、華僑学校と家庭教育にある。中国の故郷への感情は希薄化したものの、神戸を拠点に中国故郷の政府とのかわりを持っている。子女のために帰化。	
	Ilc	男	広東	横浜	1948	華僑学校に通ったことがある。日本語、中国語	華僑総会勤務。華僑運動の経験あり。	華僑学校の教育や華僑運動のことで強い中国人意識を獲得した。華僑総会の仕事の関係で中国や新華僑と接触し、「日本華僑」というアイデンティティを持つようになる。	
	IId	男	福建福清	京都	1949	日本の学校に通い、日本語しか話せない	貿易業を経て華僑総会に勤務。同郷会の活動にも参加。	華僑運動への参加や華僑総会、同郷会の活動の中で、強い中国人意識を獲得する。自ら新華僑と区別する一方、中国、福清に強い関心を抱く。	

い。彼らはほとんど日本人の若者と同じように様々な職種について、各分野で活躍している。従って、華僑三世が集まり、交流する機会はほとんどなく、彼らに対してまとまった意識調査を行うのも困難な状態にある。1998年再び主催されるようになった華僑青年交流会⁹⁾には、こういった華僑青年に交流の機会を提供し、日本華僑としての意識を持たせたいという二世の狙いが込められている。筆者もこの交流会に参加し、華僑三世と交流し、彼らの意識を伺うことができた。以下、数名の華僑三世の語りを通し、彼らのアイデンティティの形成過程を考察してみたい。

3.1 中国人らしき名前との葛藤

IIIe は、江蘇出身の華僑三世で、1978年に大阪で生まれた。現在中国国籍である。IIIe の実家は大阪だが、奈良で父親と不動産会社を経営している。2003年7月の交流会から2004年の8月にかけて、IIIe に数回にわたってインタビューを行った。

「俺、なんにも知らないよ、ほんとに。華僑のこと……日本で生まれて、日本の学校に行くと、日本語しか話せなくて、日本の文化しか知らなくて。というか、心は日本人だと思う。」と、「華僑について何かお話を」と依頼した筆者に対して IIIe は少し困惑した。「京都に中国人墓地があって、華僑の葬式にそこに行ったことがある。中国は土葬で日本は火葬であるところが、中国と日本のお葬式の違いではないかな。」と、IIIe の知っている日本と中国の唯一の違いを筆者に語ってくれた。

そしてこのインタビューから一年経った2004年8月、IIIe に、中国人として日本の小学校に通い始めてから現在までの経験を語ってもらうことができた。

IIIe は自分が中国人だと意識したのは小学校の時だという。当時、他の子どもと違って、自分の苗字は一文字だったのを不思議に思った。中学一年生のはじめに引越して転校したのを機に、IIIe の親は IIIe の名前を一目で中国人だとわからないように改め、登録してくれた。後になって、IIIe は親の苦心がわかった。「まったく友達のない学校に行くと、中国人だということはいじめられたりしたらかわいそうだから、日本名にした」。IIIe 自身は、いじめは個人の間人性の問題だと考えるが、親は中国人の苗字で珍しがられて、いじめのきっかけになってほしくなかったのだろうと解釈している。結局、彼は高校を卒業するまで日本名で学校に通っていた。

高校卒業後、IIIe は自分が中国人であることを、日本名しか知らない友人に明かさなければならぬ時が来た。IIIe の自動車免許証の「本籍」欄に「中国」と記載されている。それまで、中国人であることを伝える必要もきっかけもないと考えてきた e は、友人と免許証を見せ合う時、どきどきしていたという。「中国人だと言ったら、

びっくりされるのだろうか。どんな反応が返ってくるのだろうか。」と、IIIeはその時、初めて中国人ということ強く意識したという。

仕事先でも、IIIeはあえて中国人らしき名前を名乗っておらず、今までの日本名で通している。「日本語しか話さず、考え方も日本人と同じなのに、何故中国人かとよく質問される。それを毎回のように説明するのは、面倒くさいからだ。ただそれだけ。」とIIIeは言う。

IIIeは、自分の意識について以下のように語った。「今にして思えば、中学の時から、中国人の名前を名乗っていれば、免許証の時のドキドキもなかったと思うし、日本名しか知らない相手に自分は中国人だと説明することもないだろうから、もっと楽だったかもしれない。もしかすると人生が変わっていたのかもしれない。」と言いながらも、「オリンピックなどは、日本人選手しか知らないの、日本人を応援している。そもそも、日本のテレビで中国の試合はほとんど映らないので、見ていない。日本対中国の場合は、日本を応援している。これは日本生まれの華僑の友達もそう言っていた。あなた（日本滞在が長い筆者）は半分日本人になった気がすると言っているが、私は、半分も中国人という気にはなっていないと思う。というか、あまり国を意識したことがない。日本対中国で戦争が起こったら、私はどうするのだろうか……」と中国人意識のなさを示した。

そんなIIIeが、中国人だと強く意識するのは、ビザを申請する時だという。ほとんどの国にビザなしでいける日本人の友人と海外旅行の話になると、IIIeはいつも躊躇してしまう。

最近、華僑青年交流会を通して、IIIeは多くの華僑の友人ができたという。2003年の交流会の後、IIIeは以下のように語った。「人の輪って、自分から積極的に広げていけばすごく広がっていくものだね。俺は、去年青年交流会に初めて参加したけど、この一年で、友達がふえた。なかなか楽しい一年だったよ」。

さらに2004年、三回目の交流会に参加した後、IIIeは交流会への思いを次のように語ってくれた。「やはり、この交流会の意図する通り、私は交流会に参加してから、中国人、華僑ということを昔より真剣に考えるようになった。姉は交流会に参加するまでは、華僑を意識したことはないと言っていた。私や私の姉と同様、交流会を通してはじめて華僑を意識した人は大勢いると思う。私たちが華僑ということ意識した時点で、交流会は半分成功したと思う」。

中国国籍を有しているIIIeは、小学校から今まで日本人の名前を名乗り、日本人として生きてきた。華僑意識を確立するまで周囲が「中国国籍」を中国人だと判断する

象徴のひとつとしてしているため、IIIeは「中国人」と「日本人」という概念の間で長く葛藤していた。しかし、彼は自分が文化的には日本人であると主張し、「国籍」という政治的な象徴を、自分のアイデンティティを定める基準として認めようとしなかった。後に、IIIeは交流会に参加し、自分の境遇と相似する多くの華僑青年と接触しているうちに、「華僑」や華僑社会について考えはじめ、「日本人」や「中国人」という一元的な概念を超えて、その境界を生きる、自分も含めた「華僑」の存在を意識するようになった。IIIeの華僑意識の確立の始まりといえよう。

3.2 「中国人」と「日本人」、そして「在日韓国・朝鮮人」

1998年初回の青年交流会に参加したIIIfは、山東出身の華僑三世である。IIIfは1978年に大阪に生まれた。小、中学校は地元の日本人の学校に通い、大学も大阪の私学だった。父も中国語が話せないという。IIIfは山東省に行ったことはないが、以前訪ねたことのある父によれば、山東にある故郷は田舎で、親戚は父や祖父にお金を要求していた。今でも時々お金を貸してくれという内容の手紙が送られてくるが、父は故郷の親戚に関わりたくないという。

IIIfの祖父は料理店を経営しており、その貯蓄でマンションを建てた。現在父は、マンションの管理をしている。IIIfは大学を卒業した後、病気のためずっと働いておらず（詳細は聞いていない）、普段は友人とテニスなどをしている。将来父の後を継ごうと考えている。

IIIfの名前は、お経が好きな祖父が名づけた。日本の学校に通っていて、小中学校まで中国人だと物珍しがられていたが、高校に入ってみんなと普通に付き合った。

IIIfは三人兄弟で、姉と妹がいる。姉とはよく喧嘩をするが、妹はかわいい。今大学生の妹は、サークルで柔道をやっている。普段、宇多田ヒカルや一青窈^{ひとよ}などの流行歌を家でよく歌っている。

両親と同じように、IIIf三兄弟は中国国籍である。将来もし日本人女性と結婚することになって、日本国籍を取れと言われたら中国国籍を放棄するかもしれない。「でも、少し面倒くさいかな。」と、IIIfは付け加えた。

IIIfは父と一緒に兵庫県山東省同郷会の集まりにも参加している。集合の場所は大体神戸市にある中華料理店である。お正月に、同郷会の全員がまず墓参りにいって、その後中華料理店で食事する。墓参りは毎年のお正月だけにする。家で中華料理はめったに食べない。

父は商売繁盛の神関羽の像¹⁰⁾を部屋に置いている。しかしIIIfは何故父親が関羽像

を置くのかよくわからない。III fは『三国志』の漫画を読んだことがあり、関羽より、賢くて様々なことが予知できる諸葛孔明が好きだという。また、中国に行ったら、関羽の墓を見てみたい。『水滸伝』も漫画で読んだよ」III fは言った。そして筆者から山東省は『水滸伝』の舞台だったと聞いた時、「ほんま？」とびっくりした顔をしたと思ったら、「山東人として自慢だ」と言わんばかりにうれしそうな表情を見せた。

このように、III fの故郷山東に対する認識は父親の見聞と、漫画で読んだ物語に限られていると言ってもよかろう。そして中国についての情報も、日本のメディアと、華僑新聞や華僑総会から入手したものに限られている。これらの情報を通して、彼は中国、日本と華僑の三者の構図の中で自らを位置付けようとした。以下、III fの中国と在日中国人そして在日コリアン、日本についての発言を整理し、彼の意識を分析してみたい。

III fは中国にかなりの好感を持っているという。しかし、最近来日した新華僑について彼は以下のように語った。「新しく、勉強や出稼ぎの目的で来日する中国人の中には、罪を犯してしまう人もいる。一部の人のせいで華僑が肩身の狭い思いをしていると思う。福岡の一家殺人事件が報道されるたびに、中国人とか華僑が疑われるのは心外やわ」。III fのこうした不安は、「北朝鮮による日本人拉致事件がメディアで報道された時、在日朝鮮人の施設が槍玉に挙げられて狙われたりした」からだと言う。拉致事件は北朝鮮政府に責任があつて在日コリアンには関係ないにもかかわらず、在日コリアンが矢面に立たされるのは、日本人が抱いてきた在日コリアンへの偏見がなくなっていないからだと言っている。

さらに、III fは以下のように語った。「もし在日朝鮮人がいなければ、華僑が嫌がらせの対象になる。そういう点では彼らに同情している。チマチョゴリが切りつけられたと聞くと妙に哀しく聞こえる」。そして彼は、こういった国内の諸民族間の摩擦を解決するには、日本政府が他のアジア諸国と平等な関係を築くことが必要だという。

III fの意識が興味深いのは、一連の在日コリアンにまつわる事件を通して、日本政府、北朝鮮政府と在日コリアンの三者関係を解釈したところである。彼は、同じく「立場の弱い者」である在日華僑の一員として、在日コリアンに対する日本人の態度や日本政府の外交政策を批判したのだった。「在日」が悪いのではなく「親玉」が悪いという彼の意見は、まさに中国と日本の関係が悪くなるうとも、華僑が日本から迫害を受けるべきではないという主張であろう。彼の主張から、在日華僑は日本社会に定住するひとつの集団であり、新華僑や中国にいる中国人と異なるものだという意味が読み取れた。III fが明確な華僑意識を持つに至ったのは、家庭での躰や山東出身華

僑との頻繁な交流が、最も大きな原因だと考えられる。

3.3 華僑青年の中国人意識の萌芽

以上の二例からもわかるように、何らかの形で華僑社会と接触することによって、若い世代の華僑は徐々に華僑意識を獲得しつつあることが伺われた。ここで、さらに青年交流会の参加者を数名紹介し、彼（彼女）らの様々な意識を見てみたい。

IIIg は 1972 年に京都に生まれた福建出身の三世である。京都で父と一緒に中華料理店を経営している。京都の普度勝会において料理部門（精進料理等）を担当しているのは IIIg 父子であり、しかも IIIg は青年交流会のリーダーでもあった。IIIg は、18 歳で中国へ留学するまで自分は日本人だと思っていたという。しかし留学の際、改めて自分が中国人だと知った。IIIg は中国本土でたくさんの知識を得て、帰国後、華僑青年交流会に参加するようになった。第六回青年交流会の時班長を務め、留学生には中国語、日本生まれの華僑には日本語と二ヶ国語を使い分けてリーダーシップを取った。普度勝会の青年交流会においても、料理部門の仕事以外に、開催準備や司会進行など大忙しだった。交流会の一環である討論の際、IIIg は参加者の華僑青年を前に以下のように語った。

「日本に生まれた華僑三世、四世の若者が、時々自分が中国人だと実感できない気持ちはよくわかる。しかし、学校在籍時、自分の名前と友達の名前の違いに違和感を覚えた経験があるはずだ……みんなはいつの日か自分の中国的な部分に気づき、意識するようになるだろう」。

IIIg の意識の変化は、中国への留学そして日本で経験する新華僑とのふれ合いから学んだことによるものであろうと思われる。そして自分のこうした経験を交流会などで、より多くの華僑青年に伝えようとしている。

IIIh は 1976 年に京都に生まれた、福清出身の華僑三世である。調査当時（2003 年）、京都大学大学院修士課程に在籍中。四回目の青年交流会（2001 年大阪にて）に参加した経験がある。二年前に日本国籍を取得した。本当は三年前、家族と一緒に帰化の手続きを申請しようとしたが、事情があって、家族に一年遅れて日本国籍を申請した。書類をそろえるのは大変だったが、実際に書類を提出してすぐ許可が下りた。姓も、日本人の中に同様の姓があることから、帰化の時に変える必要はなかったという。

四年前、IIIh が大学四年生の時、祖父が病気でなくなり、自分の就職もなかなか決まらなかった。色々悩んだ末、IIIh は、一度祖父の故郷である福清に行ってみようと初めて中国に旅に出た。福清にいるのは、祖父の従姉妹であり、日本人の感覚から

みれば自分からかなり遠い親戚となる。しかし、それにもかかわらず、みんな親切に接してくれて、色々話をしてくれた。「その旅で経験したことはすごく印象深かった。」と彼は語った。その後、IIIhは京都大学大学院の修士課程に進学し、中国の農林業を研究し始めた。彼は、一年間福清でフィールドワークを行っていた。その間、福清の親戚の中に地方政府の有力者がいるので、福清での調査と観光は不自由なく行われた。またIIIhの、福清でのもうひとつの収穫は、祖父が家に宛てて書いた手紙や、祖父が亡くなる前に書いた手記などを発見したことである。それらはコピーして日本に持って帰った。IIIhは「修士課程が修了した後、まず日本の会社でしばらく働いて経験を積み上げ、お茶の商売をしたい。祖父の故郷福建でお茶を栽培し日本や他の国に輸出するような商売をしたい」と抱負を語ってくれた。

IIIhのこうした経験の背後には、日本経済の不景気や中日間貿易の拡大などの時代的背景もあり、彼のアイデンティティの形成には経済的要素も作用したと思われるが、初めて故郷を訪ねた旅およびその後の中国研究は、疑いなくIIIhに中国人や華僑について深く考える機会を与え、彼の故郷福清や中国に対する認識を高めたのであろう。

IIIiは1976年に生まれた華僑三世である。現在横浜市在住の、歯科医である。IIIiは、「住んでいる場所は中華街に遠くはないけど、中国人とはそれほど関わっていないね。自分も、中国人として意識したことはあまりないし。名前も中国語ではなく日本語読みで呼ばれている。中国語で呼ばれるのは、税関でパスポートをチェックされる時だけかな。」と、自分は中国人意識を持っていないと言う。一方、「自分は何だろう。日本人ではないけど、中国人でもないね。両方混じっているからね。でもどちらかという日本人が70%で中国人は30%かな」と、IIIiは自分が全くの日本人でもないと話した。

IIIjは1969年生まれ華僑三世である。現在旭川市で歯科医をしている。華僑の友達を作ってくるようにと親に言われ、2003年に初めて青年交流会に参加した。「横浜中華街ははじめてみた。関帝廟は派手ですごいね。」と、IIIjは少し興奮気味で言った。しかし一方、「お正月や清明節などの中国の行事は、うちでは何もやっていない。私は中国の文化について何も知らない。」と呟いた。

IIIjがいたチームには中国からの留学生が四名いた。IIIjにとって、本土からの中国人と接触するのも今回は初めてだった。彼女は、交流会が終わり、旭川に戻った後も、「3日間楽しかったです。今回留学生の方と知り合えて、頑張っている様子を聞き、励みになりました。」と感想を述べてくれた。IIIjは、交流会を通して華僑社会を

知り、中国人留学生と接触して、初めて自分について、そして華僑について意識し始めたのだった。

IIIg, IIIh, IIIi と IIIj が共通しているのは、中国や中国人と関わるようになってから、中国や中国人について考えはじめたところである。中でも IIIi と IIIj のように、中国国籍の保持者でありながら、普段日本人としか接触せず、中国や故郷についてほとんど知識と興味を持っていない華僑青年は、日本ではむしろ多数存在している。華僑社会や中国と関わりを持つことは彼らの中国人意識の萌芽に繋がったと考えられる。

以上事例として取り上げた IIIe, IIIf, IIIg, IIIh, IIIi と IIIj 六人の華僑三世は、華僑社会と深く関わってきたものもいれば、これから関わろうとするものもいる（表2）。彼らは中国国籍や中国人らしき名前を持つものの、二世と比べて、一層文化的に日本に同化しており、中国人ではないことを明確に主張するものが多い。その語りからわかるように、彼らは文化的に日本人アイデンティティを持ちながらも、政治性を帯びた象徴としての「中国国籍」を有するというジレンマに行き当たっている。それは、「中国国籍」であるがゆえに周囲の日本人から「中国人」と見なされる一方、自分は中国語を話せず、中国や中国文化について何も知らない、そのため中国人からは日本人と見なされる（例えば IIIe や IIIi）という困惑である。

一方、華僑青年交流会などで他の在日華僑や中国にいる中国人と接触しているうちに、彼らの意識には少し変化の兆しが見えてきた。上述したように中国留学や在日華僑の文化活動に参加することによって、「日本の華僑」、「中国人」について考えはじめ、自分のルーツに関心を持つようになった者が多い。また中国から日本に渡り、基盤を作り上げた祖父の世代に興味を持ち、ルーツ探しを仕事に結び付ける華僑三世は IIIh の他にもいた。華僑三世はもはや、「中国でなければ日本」という二項対立的な選択基準から脱却し、それを越えたアイデンティティの枠組みを模索して自らそれに帰属する意識を持ちつつあるように思われる。

4 華僑社会への「リターン者」とエスニック・アイデンティティの操作

以上の2, 3章で、それぞれ二世と三世のアイデンティティの形成過程を見てきた。この章では、「日本人」と「中国人」の二つの境界を乗り越えようと生きてきた三人の「リターン者」の事例を通して、華僑アイデンティティは如何なるダイナミズムを

表2 華僑三世の体験とアイデンティティの対照

世代	人物	性別	出身地(中国)	出身地(日本)	出生年	教育と言語	職業と社会活動	アイデンティティの特徴	世代の共通点
三世	IIIe	男	江蘇	大阪	1978	日本の学校に通い、日本語しか話せない。	不動産経営。中国や中国人と殆どかわりはない。	中学校から日本人の通称名を使い、日本人として生きてきた。日本社会に同化しており、中国を意識したことは殆どなかった。青年交流会に参加し、華僑の友人が増え、華僑を意識し始めた。	①祖父の故郷とのつながりはなく、故郷や中国について殆ど知らない。②(中国に行く前まで)中国語を話せない。中国よりは日本に帰属意識を持つ。③在日華僑の活動に参加し、徐々に中国人、華僑を意識するようになる。
	IIIf	男	山東	大阪	1978	日本の学校に通い、日本語しか話せない。	病気の為、無職。父親のつながりで兵庫県山東省同郷会に定期的に参加。	故郷山東省について父親から聞いた情報以外、殆ど知らない。文化的に日本に同化しているが、日本のメディアにおける中国、在日中国人に関する報道に敏感。自分(華僑)を在日コリアンと比較対照し、日本社会における華僑の正当な地位を主張する。	
	IIIg	男	福建福清	京都	1972	日本の学校に通い、18歳から中国留学。	中華料理店経営。父親と一緒に同郷会、華僑の文化活動などで活躍。	中国留学で初めて中国人意識を獲得する。交流会や華僑活動を通して、自分の経験と結びつけて、中国人、華僑の意味を多くの華僑青年に伝えている。	
	IIIh	男	福建福清	京都	1976	日本の学校に通い、21歳に初めて故郷福清に旅行。	大学院生。福清の農業を研究対象とする。	福清への旅は意識変化のきっかけとなる。自分の出自に興味を持ちはじめ。故郷と関連する仕事を展開していくと希望する。	
	IIIi	男	不明	横浜	1976	日本の学校に通い、日本語しか話せない。	歯科医。華僑青年交流会で活躍。	中国人意識が薄く、日本人意識を持つ。	
	IIIj	女	不明	旭川	1969	日本の学校に通い、日本語しか話せない。	歯科医。中国や華僑と殆どかわりを持っていない。	中国、中国人を意識することはなく、文化的に日本化している。	

持ち形成されていくのかを細かく分析してみる。以下、「日本社会に飛び込む」、「華僑社会への復帰」、「華僑コミュニティへ溶け込む」というプロセスを経た三人の華僑の語りを分析し、彼らにとってエスニック境界の「象徴」となるものは何か、そしてエスニック集団に属するとは如何なるものかの問題について議論していく。中でも、父母あるいは家庭教育、華僑社会そして日本人社会の反応、故郷や華僑社会への積極的な行動などに注目し、彼らの中国人と日本人意識の変化過程を明らかにしたい。

4.1 「日本人になりたかった」

R.k (リターン者のkさん) は福建出身の華僑である。彼には、2003年4月と10月の二回にわたってインタビューをした。

R.k は、三人兄弟の長男として1959年兵庫県西宮市に生まれた。上に姉が、下に弟がいる。母も福建出身である。曾祖父の代より日本に移り住んだので、世代的には華僑四世となる。その時代の福清出身の華僑はほとんど呉服の行商人だったこともあり、曾祖父と祖父もまた呉服の行商をやった。曾祖父はしばらく日本にいたがその後福建に戻った。後に、祖父は一人で再び日本にきたが、故郷に戻るつもりで家は福建に建てた。今は、伯母(父の姉)が住んでいて、R.k家を故郷と強く結び付ける絆となっている。父親は、呉服の行商を辞め、ボーリング場に勤め、その後飲食店でのマネージャーを経て、自分の店を持つようになった。

祖父は、R.k が生まれる半年前に亡くなった。小さいころ、祖母と一緒に住んでいたが、祖母はあまり祖父の話をしてくれなかった。祖父に関する話は、大体父親から聞いた。祖父は、福建同郷会草創期の中心人物で、多くの福建出身華僑の来日時の保証人になった。戦時中、スパイ容疑で、他の中国人と共に連行され、拷問を受けたこともある。

R.k は小さいころ、自分が中国人であると意識したことはなかった。学齢になった時、神戸市内にある中華同文学校は子どものR.kには遠過ぎると考えた祖母は、R.k を家の近くにある日本の学校に入学させた。小学校に入って、R.k は最初何も感じていなかったが、高学年になって、歴史教科書の中で自分と同じ苗字の人物を見て、自分が中国人だと意識し始めた。その時は「すごく嫌だった。日本人になりたかった」という。

高校卒業後、R.k はすんなりと日本の会社に就職した。R.k は、「日本人として生きていこう」と思い、入社してから仕事に励み、まもなく係長に昇進した。しかしその後、後輩は次から次へと自分を超えて昇進したものの、R.k は係長止まりであった。

仕事上人と接する機会が多い R.k は、社員証に書かれた自分の、外国人らしき名前のせいで、多くの苦勞を味わったという。しばしばお客さんから「韓国人やろう？」と在日コリアンと思われたが、そういう時 R.k はいつも「いや、中国人です」と毅然として答えたという。また、「あいつは中国人だから嫌だ」と文句を言って、担当の変更を要求する客もいた。「日本人の中には、頭が固い人がまだ多い。中国に好感を持って、かわいがってくれる日本人のお客さんもいたが、1989年天安門事件の時に『中国はどうしてそんなことをするの?』と、私に怒ってきた」と、R.k は当時のことを回想した。

1995年阪神大震災直後、R.k だけは震災「見舞金」を会社からもらえなかったのので、訳を聞いてみたところ「あ、君のこと忘れとった」と言われた。「日本の会社においても結局差別を受ける運命になるから」と、震災をきっかけに、会社を辞めた。

日本人と同様に生きていこうと思い、努力し続けてきた R.k にとって、この震災は肉体的にも精神的にも大きな打撃であったのだろう。当時 36 歳、人生の転機であった。

その後 R.k は、日本人になるのを諦め、中国人として生きていくことを決めた。1998年11月、父の勧めで中華会館で働くようになり、それと同時に福建同郷会での仕事もはじめた。同郷会のメンバーは、神戸中華同文学校の卒業生が多く、R.k とは「学縁」的な結びつきはないのだが、R.k は「より多くの華僑とのネットワークを築いていきたい」という意思から、現在閩帝廟の管理や普度勝会などにも積極的に参加し、行事の進行などを父や他の先輩から教わっている。「いずれ父親の代わりに普度勝会などの行事を主催できるように頑張りたい。」と、彼は華僑の歴史や文化について勉強し始めた。

華僑社会に戻った後、R.k はますます中国国籍を捨てたくなかったという。R.k の姉は、長年デパートで勤めており、現在主任にまで昇進した。「女性であるせいもあるだろうが、中国人だから、これ以上昇進することはないと思う。彼女は最近、海外旅行にすんなりいけたらと帰化したいと言っている。弟も帰化する意思がある。でも僕は、決して帰化しない。」と、R.k は硬い表情を見せながら言った。

R.k の妻は、上海生まれの華僑である。「華僑」と呼ぶのは、彼女の両親が 1950 年代に新中国建設のため帰国した華僑だからである。妻の両親は R.k 家の親戚と知人であり、この親戚の紹介を通して、二人は見合い結婚した。妻は中国生まれだが、両親の躰を受けて考え方が日本の老華僑と同じだという。二人の間では、日本語が使われている。R.k は、子どもが生まれたら、神戸中華同文学校に行かせたいし、自分も中

国語を勉強し、家族と中国語で会話をしたいと言う。

「将来的には、上海で自分の会社を経営したい。妻も上海に住みたがっているし、私の事業計画に賛成して、何か手伝ってくれると思う。半分上海に住み、半分日本に住むという感じかな」と R.k は夢を膨らませている。

R.k は、中華会館に入ってから、新華僑の存在を気にするようになった。「彼らは、パワフルですごいと思う。みな事業を興したりして、最近では、西日本華僑華人聯合会¹¹⁾ とかができていると聞いた。中華会館は門戸を開放しているが、新華僑は、中華会館に入ろうとしない。老華僑も、長年蓄積してきた財産を簡単に新しい華僑に渡そうとしないのもあるのだが。」と、R.k は新華僑と老華僑の特徴を少しずつ認識し始めた。

小学校の時から自分が中国人だと意識したにもかかわらず、R.k は日本人と同様に生きていこうと努力してきた。しかし、中国人らしき苗字のせいで客から嫌がれ、「中国人」という身分(国籍)のせいで会社から排除されるなどの差別を受けてきた。つまり、ここで中国人らしき名前と国籍といった文化的シンボルは、日本社会が彼を「中国人」というカテゴリーに分類し、差別した原因となった。その後、R.k は中華会館などの仕事を受け持つようになるが、華僑社会から離れて日本社会に同化しようとした時には障害となっていた中国人としてのルーツ、中国人の名前、中国人や中国社会との関わりといった文化的シンボルが、ここで利点として働くようになった。さらに、中国語や中国文化を受け継ぎ、多くの華僑とのつながりを大事にし、華僑社会に積極的に関わろうとする姿勢も、再び中国人として自他ともに認められるための強みであると彼は気づいたのである。実際、R.k の語りの中から、彼が老華僑の立場に立ち、物事を考えるようになり始め、意識が変化したことが窺われる。彼は、それまでと比べ、中国文化や国籍などを「日本人」と区別されるシンボルとして強調し、自分を「中国人」だとアイデンティファイした。そして「新華僑」とも区別し、自らを「老華僑」と位置付けたのである。

4.2 「『華僑』から逃げたくて」

R.1^{エル} は、1960年横浜に生まれた華僑二世であり、現在横浜山手中華学校の教師をしている。以下のインタビューは、2003年5月に行われた横浜華僑婦女会成立50周年の記念写真展において行われたものである。

R.1の父は、横浜華僑運動¹²⁾のリーダーであり、横浜の華僑教育に大きく貢献した

人物である。インタビューの席で、彼女は父が写っている写真の前で立ち止まり、真剣な顔で見つめた。筆者と父の話をし始めた時、彼女の目が潤んできた。「若い時、中華街や華僑をとにかく離れたくて仕方がなかった。その時なぜか父親と母親の名前を聞くだけで嫌になって、そしてどこかに逃げたくなった」と、両親への強い反発心から、R.Iは横浜山手中華学校を経て日本の大学を卒業した後、日本の会社でファッション関係の仕事に就いた。日本人と同じように生きてみたかったという。

ここで、少女時代のR.Iはなぜ華僑社会に対して反発を覚えたのかを理解するために当時の時代背景を述べておきたい。彼女が生まれ育った1960～70年代は、横浜の華僑社会はイデオロギー闘争、日本に対する民族運動が最も激しかった時期である。さらに1966年の文化大革命、1972年の日中国交回復などの一連の大事件は、思春期にあったR.Iに大きな影響を与えたと思われる。こういった濃厚な政治的雰囲気の中に生まれ育ったR.Iは、中華学校で十分に民族教育を受けていたにも関わらず、中国に行ったこともなければ、中国を本当に理解しているとも思えなかったという。「自分は一体誰なのか」という複雑な心理から、華僑運動のリーダーとしての中心的役割を担っていた両親に対して反発と抵抗が生じたことは想像し得る。悩んだ結果、彼女は中華街を離れる道を選んだ。「両親から離れて、中華街を出れば、自分は誰なのかわかるだろうと思った」。

しかし、7年前、父は定年退職して中華街の活動からも引退し、弟も結婚して中華街にある家からいなくなった。いざ華僑社会や中華街と関わりがなくなりそうになると、R.Iは、すごく淋しさを感じたという。その矢先教員が不足していた山手中華学校から声をかけられ、中国語の教師として山手中華学校に入った。数年前、R.Iは日本人と結婚した。現在、R.Iは学校の仕事に専念し、また時間があるときに太極拳なども習っている。

彼女が両親に反発していたのは、つまり自分を「中国人」であるとアイデンティファイできなかったのであり、自分が中国を理解していなかったのだと解釈したのである。そのため、自分探しの過程で日本社会に飛び込んだが、家族の誰もが中華街と関わりを持たなくなった時、R.Iは生まれ育った故郷である中華街を彼女のルーツであると再確認し、自分の奥に潜んでいた最も原初的な帰属意識に目覚めたのである。それまで「本当の中国人でもなく日本人でもない」と悩み、華僑社会から逃避しようとした彼女は、「中国人」と「日本人」の境界線を生きていたとするのなら、現在、横浜華僑、中華街の一員として前向きに生きていこうとする彼女は、「中国人」と「日本人」を自分の中でうまく統合し、一元的な「中国人」と「日本人」の概念を超越し

た「華僑」としての意識を獲得したといえよう。

4.3 「自ら飛び込むことが重要だ」

R.m は、神戸市在住の台湾出身の華僑二世である。R.m の父は 1911 年日本統治下の台湾に生まれた。父は 22 歳（1933 年頃）の時単身来日、神戸に居を構えた。そして 35 歳の時、神戸出身の華僑四世である母と結婚した。当時母は 25 歳だった。戦後父は会社を興し、R.m は 1951 年次男として神戸に生まれた。

R.m が 8 歳の時に一家 5 人で初めて里帰りし、台湾の祖母に会った。母は大阪の金蘭女学校を卒業した才女であり、教育にも熱心で R.m 三兄弟を厳しく育てた。R.m は 3 歳の時から 3 年間神戸華僑幼稚園に学び、その後小学校 5 年生の一学期まで神戸中華同文学校で学んだ。学校以外では、バイオリンやソロバンや書道なども習った。子どもの時は元町の商店街や南京町が遊び場だった。小学校 5 年生の二学期から、父母は日本の大学へ進学できるように、R.m を近くの日本の小学校へ転校させた。「自分の意思で決めたことでないし、子ども心には非常に複雑だった」R.m は同文学校の同級生に何の連絡もせず、9 月から同文学校の近くの学校に入った。「下校の時に、それまでずっと同級生だった友達と時々道を隔てて会うことも多く、何か悪いことをしているような気持ちでいっぱいだった。」と、R.m は当時の心情を語った。転校後、両親は家庭教師を雇い、兄弟三人の勉強を見てもらうことにした。R.m はその後中学校、高校そして大学へと進学した。大学は、両親の意思で理系学部を選んだ。友人はほとんど日本人だった。

大学卒業後、R.m はあるメッキ会社に入社し、技術管理・生産管理・現場管理の仕事をした。5 年後、この会社を辞め、印刷会社の営業を 6 ヶ月経験し、ある油脂会社に再就職した。会社では、R.m は上司の作業を毎日見ながら、仕事の要領を盗み覚えた。後にこの上司に代わって、彼がその職場の責任者となった。「二ヶ月間連続で一日も休日がなく、6 ヶ月間不眠不休で仕事をしたこともある」ほどその後も仕事に励んだ。この努力が認められて、R.m は係長から課長、次長と昇進した。しかし、部長になると同時に別の現場に配置換えさせられた。長年の激務から、R.m は心不全となった。年齢に伴って腰痛にも悩まされるようになった。2002 年に R.m は 21 年間勤めた会社を辞めた。後に再就職を試みたが、年齢などの関係で失敗に終わった。会社からの辞職と、病気で寝たきりの母の介護のストレスからうつ状態になった。

仕事が忙しかったせいか、気づいたら 40 歳になっても独り身だった。台湾の親戚からの紹介で見合いだけは何十回もした。ある金門出身の女性と恋愛していて婚約の

段階まで来たが、自分の作業服姿と狭い家は彼女を不安がらせ、結婚には至らなかった。その後、台湾の親戚から紹介された女性と結婚したが、すぐ離婚した。

2002年の冬、R.mは神戸華僑歴史博物館の手伝いを依頼され、博物館でのボランティアをはじめた。神戸華僑歴史博物館では、R.mはできるだけ、華僑の歴史を現在と関連づけながらわかりやすく説明しようとしているという。「例えば、『籍牌』のことについて説明する前に、まず自分の外国人登録証明書を出して説明する。「永住」の部分も説明する。在日朝鮮人は、強制連行されてきた人々がほとんどであり、指紋押捺に反発する意識が今でもあると思うが、華僑は、自分の意思で日本に来ているから、日本に住まわしてもらっているという意識を持っている。少なくとも私はね。」と、自分の華僑である身分を博物館の仕事に生かしている。「このように面白く説明する方法は、館長らが説明する時に黙ってそばに立って覚えたものだ。会社で技能を覚えるのと一緒に。」と、彼は言う。R.mは華僑歴史博物館で案内役を務め、詳しく面白い説明は来館者を満足させているようで、よく礼状をもらう。生きがいを感じられるという。

最近、R.mは彼のルーツである台湾に関心を持つようになった。「R.m家に伝わる家系図では、先祖は福建省漳州府龍溪県から清代に台湾に移民したと記録されている。今でも毎年4月の清明節になるとR.m家一族の子孫が集まり、台北県の観音山麓にある一代目、二代目先祖の墓に参る。このことを私が知ったのは今から15年ぐらい前だった。家族そろって台湾に帰って生活をはじめた兄から、清明節に一族で墓参りしている写真と家系図が送られ、初めて自分の血のルーツを自覚するようになった。自分自身は七世にあたり、会ったことのないR.m家の子孫が台湾にはたくさんいることを知ってから、いつか自分も清明節に一族の一員として先祖の墓参りをするのを夢見ている。」と、R.mは語った。

現在、R.mは地元のラジオ番組などに出演し、華僑歴史博物館を紹介・案内すると同時に、「神戸に生まれ育った華僑は、血のルーツは中国だが心の故郷は神戸だ」と繰り返して強調し、自分のエスニック・アイデンティティを主張している。

以上、小学校五年生から日本社会に飛び込んで、日本人として生きていこうとしたがその後様々な原因で再び華僑社会で生きることになったR.mの人生の歩みを見てきた。以下、R.mの一連の発言を通して、彼の意識変化の過程を改めて見てみたい。

「神戸に弟も住んでいるが、全く中国人意識を持っていない。名字も日本人の名前のように呼んでいる。私たちの中国人意識を確立しようとしなかった親を責めるつもりもない。これは全部自分の意思で決めることだと思う。私も小学校五年生までしか

華僑社会とのつながりはなかった。日本の学校、そして日本の会社。私は日本人社会に飛び込むしかなかった。同級生の中に私のことを『日本人になりたがっていた』と見ていた人があった¹³⁾ かもわからないが、同文学校を離れて、日本人の学校に転校するのは、すごく淋しかった。日本の会社に勤めていた間、一回も同窓会に参加したことがないし、名簿にも載っていない。忙しかったのも原因だった。」と、華僑社会を離れる意思がなかったことを強調した。

一方、「会社にいた時、親しくなって、自分から華僑だと打ち明けた人もあるが、ほとんどの人は知らなかった。たまたま名前は、訓読みすれば日本人と変わらないから」と、意識的に自分の中国人としての出自を隠していたことがわかる。確かに R.m が言ったように「会社であんなに忙しく働いたら、日本人か中国人かというより一人の人間という意識しかなくなる」ということもあろうが、そこからまさに、日本文化を吸収して育った自分が、中国人としての出自さえ隠し他の人と同様に仕事をすれば、日本人と変わらないと思った R.m の考えが窺われる。

さらに、神戸の華僑社会に再び戻った R.m は、「ある時期までは、自分は日本社会の中で孤立しているように錯覚していた……自分は本当の中国人でもなければ、日本人でもない、中途半端な人間と思った。しかし、今、多くの華僑の友達がいる、台湾にも多くの一族の人たちがいる。中国人であり、日本人であることを利用して、前向きに生きていくべきだ。自分が今住んでいる神戸で、中国と日本の両方に役に立つように残りの人生を送ろうと考えている。これからは華僑社会のために生きたい。」と、積極的な人生観を語った。

このように、R.m は様々な経験を重ね幾度にもわたる意識の変化を経て、現在の華僑意識を獲得したと思われる。彼はどのような環境に生きるとしても「自ら飛び込む」という生き方が重要だと考え、周囲にいる日本人や華僑との行動様式や考え方における差異を積極的に縮小することによって、日本社会または華僑社会の一員として認めてもらおうとした。

以上、一度日本社会で生きていくことを試み、また華僑社会へ「帰還」した三人のケースを見てきた(表3)。日本人として生きていこうと努力したにもかかわらず、「中国人だから」という理由で差別や排除を受けた R.k、華僑社会のリーダーとして注目された両親から離れようと日本社会に飛び込み、自分が華僑社会と関わりがなくなる時に寂しさを感じた R.l、そして親の意思で日本の小学校に転校し、そのまま日本社会で青春を過ごした R.m。三人とも、何らかの理由で華僑社会を離れ、日本人と

表3 華僑社会への復帰者の体験とアイデンティティの変化

人物	性別	出身地 (中国)	世代	出身地 (日本)	出生年	教育と言語	日本社会 との接点	職業と 社会活動	転職の 理由・契機	アイデンティティ特徴	世代の共通点
R.k	男	福建福清	四世	兵庫西宮	1959	日本の学校に通い、日本語しか話せない。	祖母の勧めで日本の学校に入學。日本人と同様になりたくて、1人倍努力した。	日本の会社に入社し、しばらく働いた後、中華会館へ転職。	中国人という理由で、客から嫌がられたり、会社の上司に無視されたりしていた。阪神大震災で平等な待遇を受けられなかった。	文化的には日本人化しているが、中国人の名前や中国国籍を保持しながらの「日本人」になりたかった。	①自ら、あるいは親の意思で日本人として生きていくことにした。日本人から認められなかった。②中国人であることを隠さない(せない)と嫌がらせや差別にあうことがある。③華僑社会に戻り、華僑の文化的シンボルにかかわり、日本人より中国人アイデンティティを主張することによって、華僑社会の「一員」として認められることを望んでいる。
R.l	女	広東	二世	横浜	1960	華僑学校(中学校まで)、日本の大学。中国語、日本語。	華僑運動のリーダーの母の影響で、華僑、中華街に反抗の心理を抱き、日本社会に飛び込んだ。	日本の会社に入社し、後、勤務した後に華僑学校の教員に。	父親が中華街の活動から引退し、弟も中華街を離れたため、中華街との接点が無くなるのをさびしく思った。	両親の影響で中国人アイデンティティが強いと思われ、日本人社会で生きてみたかった。現在、華僑、中国人として生きていくことを決めている。	両親の影響で中国人アイデンティティが強いと思われ、日本人社会で生きてみたかった。現在、華僑、中国人として生きていくことを決めている。
R.m	男	台湾台北	二世	神戸	1951	五年間華僑学校に通っていた。日本語、中国語。	両親の意思で華僑学校を中退し、日本人学校に転校。華僑であることを公表せず、日本人と同じように働いた。	日本の会社に入社し、勤務した後に華僑歴史博物館のボランティアに。	過労で病気になる、再就職は出来なかった。華僑から華僑歴史博物館での手伝いに誘われた。	五年間中華同文学校にいたことや、当時の同級生から暖かく迎えられることを強調し、華僑アイデンティティを主張する。	

して生きていこうと努力し、そして、それぞれの事情によって華僑社会に戻った、という人生を体験した。この三人のケースから以下のようなことがわかる。

まず、彼らが「日本人になろう」として最初にとった行動は、今まで所属していた華僑社会を出ることである。つまり、華僑社会のシンボルとされる華僑学校や同郷会などの組織・団体に所属せず、華僑の集団行動に参加しないことを、日本社会の一員として認めてもらうための基本条件と見なしていると思われる。つまり、言語、価値観、行動様式などにおいて日本人と同様な彼らにとって、上記の数少ない中国人的シンボルを切り捨て、華僑社会から一步踏み出せば、日本社会の一員になると考えていたのである。一方、華僑社会に戻った彼らは、華僑社会特有の言語・文化を身につけることより、まず中華会館、華僑学校、華僑歴史博物館のような華僑の団体・組織に所属し、華僑の団体行事に積極的に参加するという行動をとっている。つまり、華僑社会の文化的シンボルといえる組織や集會に積極的に参加することによって、他の華僑たちとの距離を近づけ、華僑社会の一員として自他ともに認められるという方法である。そして内面的には帰属意識が「日本社会」から「華僑社会」への境界移動が行われていると言える。

5 おわりに

本稿では、個々人のライフ・ヒストリーを通して、ミクロな視点から二世、三世および日本社会から「帰還」した華僑の民族的・文化的アイデンティティの確立・維持の過程を考察してみた。

中国出身の親を持ち、日本に生まれ育った華僑二世は、徐々に日本社会に根ざした中国人意識、つまりエスニック・アイデンティティを獲得した。彼らは、同郷人との助け合い、同じ中国人との交流および中国（故郷）とのつながりといった文化的シンボルを日本社会と区別されるものと見なしてきた。一方、こうした華僑二世を親に持ち生まれ育った三世にとって、特に華僑アイデンティティの確立の兆しが見えた六人の事例から、国籍や名前が中国人であるためのシンボルとなっていることがわかる。つまり「中国人」という概念が持ち合わせる政治的な意味合いと文化的な意味合いを彼らの中で統合することは容易ではないと思われる。また、日本社会に出て、日本人と同様に生きようと努力し、再び華僑社会に戻ったりターン者の経験は様々な背景と理由に基づいたものであるが、いずれも再度作り上げた華僑社会とのつながりを通してエスニック・アイデンティティを獲得したのである。

国家としての中国を連想させる「中国人」という概念は、今中国の「周辺」にいる華僑の中で様々な意味をなしている。中国本土の中国人は疑いなく「中国人」と認められるが、日本に生まれ育った中国国籍を保持するものを中国人といえるか。また、中国人の血を引きながら日本国籍を有するものを中国人といえるか。

「中国人」の政治的な意味合いから言えば、明らかに前者は肯定され、後者は否定されるであろう。しかし、文化的な意味合いから言えば、答えが違ってくるものではないか。つまり、アイデンティティは、本人の帰属意識そのものによって確立されていくものである。この意味から、中国人は、必ずしも中国国籍を有し、中国語を話し、中国文化を保持しなければならないとは限らないことが推論できる。

しかし、華僑が自分自身を規定し、帰属意識を確定していくには、様々な外部要因が影響している。本稿で取り上げた13人の事例からわかるのは、エスニック・アイデンティティの確立・維持には、第一に何らかの形で華僑社会や中国文化との関わりを持つことが極めて重要だということである。日本社会への同化に伴い、華僑組織・団体の機能が低下したこともあり、華僑三世が二世のように、他の華僑との頻繁な交流の中でアイデンティティを獲得することは困難だと考えられる。一方、近年長崎、神戸、横浜などの中華街を舞台に展開された華僑の文化活動は、その地域の華僑青年のアイデンティティの確立に積極的な影響をもたらし、華僑社会全体にも日本社会におけるエスニック集団として多大な自信を与えた。今後これらの地域の華僑を中心に、より広い範囲での華僑の文化活動への参与が期待できる。また、日中間の経済的・文化的領域での相互作用や日本社会の国民レベルの民族・文化認識の向上なども華僑のエスニック・アイデンティティの確立・維持に無視できない影響を及ぼすことが窺われた。今後、中国経済の発展や国際社会における地位の向上・日中間経済的交流の強化、および、他のエスニック集団の文化を尊重し、彼らの権利を保障するという、多民族、多文化社会を目指す日本社会の動きなどは、華僑アイデンティティの確立にとって有利な環境となろう。

本稿はライフ・ヒストリーの形で、様々な背景を持ち、それぞれ異なる経験を持つ個人々の華僑の語りを通して、彼らの内面的世界を窺い、エスニック・アイデンティティ形成の過程について考察を試みたが、長崎、神戸、横浜の中華街や各同郷会の行う活動およびそれに関わる華僑へのさらなる考察はもちろんのこと、様々な角度から全国に散らばっている華僑と彼らの経済的・文化的活動に関する調査も今後の課題として残される。

謝 辞

本稿は名古屋大学大学院国際開発研究科 2004 年度の博士論文『日本華僑による文化提示・主張とエスニック・アイデンティティ——横浜と神戸を中心に』の一部を基に加筆・修正したものである。論文執筆に当たって貴重な助言を頂いた、名古屋大学大学院国際開発研究科の内田綾子先生、櫻井龍彦先生、二村久則先生および、国立民族学博物館の陳天璽先生、兵庫県立大学（元神戸商科大学）の陳來幸先生に心から感謝する。また、2003 年から加わった国立民族学博物館特別展「多みんぞくニホン——在日外国人のくらし」からも大きな示唆を与えてもらった。展示の準備会や研究会で様々な角度からご意見・ご指摘くださった庄司博史先生をはじめとした諸先生・諸先輩に御礼を申しあげたい。そして何よりもご多忙にも関わらず、長期にわたってインタビューに応じてくれた華僑の方々に心より感謝の気持ちを表したい。

注

- 1) 日本の華僑総会は、会員資格を基本的に中国国籍の保持者に限定しており、日本国籍を取得したものは自動的に華僑総会を離脱することになるため、華僑総会の会員を対象として行われたアンケートに基づいた朱の分析は、当然のように「日本の華僑社会は華人化しなかった」との結論に導いたと考えられる。
- 2) 海外に移民した中国人に対して、中国政府は、1956 年の国籍法に基づき、中国国籍を保持するものを華僑、居住国の国籍を取得（保持）するものを華人と規定した。華僑は、中国本土にいる中国人同様の権利を持つが、華人は居住国の国民として、居住国に貢献すべきだというのが、中国政府の方針である。その影響を受け、これまでの華僑・華人研究は中国国籍の保持者、つまり「華僑」の人数の統計・確認に基づいた分析が多く、華僑・華人をエスニック集団と見なす視点が欠けていた。最近、国籍という政治的要素とは別に、華僑の文化的アイデンティティを重視する立場から、従来の「華僑」「華人」を一括して「華僑・華人」と表現したり、あるいは「華僑」、「華人」のどちらか一方の用語を用いてすべてを表わすのが通常化しつつある。一方、華僑研究の対象者を中国国籍保持者に限定しないのは、華僑、華人の人数を確定できないという不利な点もある。新華僑が来日することのなかった 1972 年以前、外国人の帰化も制限されていたため、「中国人」として登録したいわゆる老華僑の人数は在日中国人の総数と大差はないと考えられる。1972 年、日中国交回復を控えて、多くの中国人が帰化し、在日中国人の登録者数は、1971 年の 52,333 人から 48,089 人へと一気に減少した（日本外務省『在留外国人統計』各年版）。その後、帰化する華僑の増加や新華僑の流入などによって、在日中国人の登録者数は大きく変わっていったため、老華僑の人数は一層把握しにくくなった。
- 3) 支那人、清国人を指す蔑称。転じて「中国人」全般を指す蔑称となった。語源については諸説あるが、清国奴の台湾語（福建語）読みが台湾の日本統治時代に訛って日本に伝わり広まったとする説が有力である。その他に留学生が用いた清国人（チンクォレン）説、中国人（チュンクォレン）説などもある。「犬ころ」などと同様の響きがあるため、日本が昭和初期中国大陆を侵略する頃から中国人を日本人より劣る民族と位置付ける人たちが好んで使うようになったと思われる。
- 4) 中国人社会は父系主義を採っており、生まれてくる子どもは事実上日本人の血を引いていても、「血統」は父親の方にあると思われるため、中国人男性と日本人女性の結婚は問題とされなかった。しかし一方、同じく父系主義を採った日本社会において、日本人男性と結婚した中国人女性は、中国国籍を離脱し「日本人」になるため、日本人男性より中国人男性との結婚を親から要求されることが多かった。ちなみに、中国人男性と結婚した日本人女性も、中国国籍を取得し、「中国人」になる場合はあったが、正式な登録をせず事実婚のままの夫婦も少なくなかったという。

- 5) 華僑学校は他のほとんどの外国人学校と同様に、日本の学校教育法において「各種学校」と位置付けられている。そのため、日本の大学に進学することを希望する者は、華僑学校高校部を卒業した後、「一条校」と定められている専門学校に在籍しなければ大学受験の資格を与えられない。この制度の制限によって、1982年に横浜山手中華学校は高校部を廃止した。中学部を卒業し、高校進学を希望する者に関しては、神奈川県内や近隣の高校が、各校独自の判断によって長年受け入れてきた。
- 6) 華僑青年闘争の略で、日本の「学生運動」に呼応した闘争。華春闘は、華僑総会が時代遅れだと批判していた。
- 7) 1985年改正された日本の国籍法によれば、1986年1月1日より、出生の時に父または母が日本国民である場合、子は日本国民となる。それまでの国籍法は父系主義を採っていた。つまり、父が日本人である場合は、子が日本国民となっていたが、中国人男性と日本人女性の間に生まれた子は中国国籍となっていたのである。
- 8) 正式名称は「華僑青年聯歓節」。1956年から68年まで開かれた在日中国人青年の祭典。1956年5月、日本生まれも含む中国人留学生によって組織された留学生同学会（同学総会）成立10周年を記念して、東京で華僑青年聯歓節（友好祭）が開催され、全国から600人余集まった。これを受け、全国各地に華僑青年聯誼会などの青年組織が出現、以降この聯誼会が聯歓節主催の主催者となった（可児（他）編2002:129）。
- 9) 中国人意識の薄い華僑青年に互いに交流する場を提供するという目的で、1998年京都で第一回華僑青年交流会が行われ、主に京都、神戸、大阪、岡山を中心とする関西地域の華僑青年が参加した。そのあと、神戸、岡山、大阪などの地域で毎年のように行われてきた。筆者も、横浜華僑青年会龍獅団のQ氏に声をかけられ、2003年7月21～23日、横浜・東京で行われた第六回華僑青年交流会に参加した。今回、中国からの留学生30名を除き、交流会に参加した残りの100名近くの華僑青年、特に神戸、横浜以外の出身者は、中国に行ったことがなく、中国語もできない人が多かった。プライバシーの保護や大会の進行などの理由から、予定したアンケートは実施できなかったが、多くのことを観察でき、特に20～40歳代の華僑青年と様々な話題について意見交換し、交流会の後も意見交換を続けられたことは予想外の大きな収穫であった。また、華僑青年交流会の参加者はもちろんのこと、スタッフとして働いている者も1972年以降生まれた三世が殆どである。そして、華僑社会や日本社会で様々な経験を積み重ね、経済的基盤を築いた二世華僑もまた、青年交流会とこうした三世を様々な面からバックアップしている。
- 10) 関羽は中国の三国時代に活躍した武将で、死後神格化されていった。中国本土、香港、台湾および世界各地の華僑社会では、商売繁盛の神（財神）として厚い信仰を集めている。
- 11) 正式には、「西日本新華僑華人聯合会」。中国留日同学会、関西在職中国人交流会、関西中国人交流協会の三団体が中心となり、2002年9月15日に創設。初代会長に立命館大学周緯生が就任。華僑・華人の団結促進、在日中国人イメージの向上を目的とする。
- 12) 第二次世界大戦前後より、中国大陸、台湾出身の留学生、華僑が数多くの組織を作り、祖国の尊厳と華僑の正当な權益を守るため、そして日中関係の改善を図るために展開した様々な運動を、華僑運動と言う。
- 13) 1960～70年代、日本国籍の取得や日本の学校に転校するということは、華僑社会と「縁を切る」こと同然と見なされる時代背景もあったが、他にもR.mは親の考えや自分の意思を要素としてあげた。

文 献

- Barth, Fredrik (ed.)
1969 *Ethnic Groups and Boundaries*. Boston: Little Brown.
- Barth, Fredrik
1994 (1969) Introduction. In F. Barth (ed.) *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*, pp. 9–38. Pensumtjeneste.
- 陳来幸
2003 「阪神華僑の国際ネットワークに関する研究」調査研究資料3, 神戸中華同文学校『校友会報』。

張 ミクロな視点から見る在日華僑のアイデンティティの形成過程

陳天璽

2001 『華人ディアスポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』東京：明石書店。

De Vos, George and Lola Romanucci-Ross (ed.)

1975 *Ethnic Identity: Cultural Continuities and Change*, Palo Alto: Mayfield Publishing Company.

過放

1999 『在日華僑のアイデンティティの変容：華僑の多元的共生』東京：東信堂。

可児弘明（他）編

2002 『華僑華人事典』東京：弘文堂。

日本華僑・華人研究会（陳焜旺主編）

2004 『日本華僑・留学生運動史』東京：日本僑報社。

桜井厚

2002 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』東京：せりか書房。

曾士才

1995 「在日華僑の社会組織と宗教行事——宇治万福寺での盆行事」『宗教ネットワーク』行路社。

戴国輝

1980 『華僑——「落地帰根」から「落葉生根」への苦悶と矛盾』東京：研文出版。

1991 『もっと知りたい華僑』東京：弘文堂。

杜国輝

1991 『多文化社会への華僑・華人の対応——日本・台湾における華僑学校卒業生の動向分析』（トヨタ財団研究助成報告書 019 号）横浜：横浜中華学院。

Tu Wei-ming

1994 *Cultural China: The Periphery as the Center*, Tu Wei-ming ed. *The Living Tree: The Changing Meaning of Being Chinese*, pp. 1-34. Stanford, California: Stanford University Press.

王維

2001 『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ——祭祀と芸能を中心に』東京：風響社。

山本須美子

2002 『文化境界とアイデンティティ：ロンドンの中国系二世代』九州：九州大学出版社。

張玉玲

2003 「在日華僑の『中国文化』観と華僑文化の創出——横浜華僑による獅子舞の伝承形態から」名古屋大学大学院国際開発研究科『国際開発研究フォーラム』23: 353-391。

2004 「横浜華僑の文化復興運動とエスニック・バウンダリーの再定位——横浜関帝廟の再建および関帝誕の創出を通して」『華僑華人研究（創刊号）』115-139。

2005 「日本華僑による文化提示とエスニック・アイデンティティの主張——神戸華僑歴史博物館の考察を中心に」名古屋大学大学院国際開発研究科『国際開発研究フォーラム』29: 153-171。

朱慧玲

1991 「在日華僑におけるアイデンティティの再構築」（立教大学大学院修士論文）。

